いずみ

特集号

●1988年8月

私の戦争体験

第10集

こどもの明るい未来のために語り継ぎます

COOP いずみ市民生協

焦熱地獄

大柳　正邦●春日丘支部

昭和十六年十二月八日早朝、軍艦マーチのメロディーに乗って「帝国陸海軍は本八日未明、米英両国と戦闘状態に突入せり」との大本営発表がラジオ放送で流れ、この日から日本は大東亜戦争に突入した。

当時、小学三年生だった私は、持病の小児喘息が治らなくて困っていた。学校には軍隊のように「ラッパ隊」があり、これにあこがれていた私は、身体を丈夫にするためにもと考え親に内緒でラッパ手になった。大詔奉戴日（毎月八日宣戦布告）には早暁より町中を眠りから起こし、出征兵士の見送り・戦死された英霊の出迎え・行軍（遠足のこと）の先導など、これがお国のためと思って一生懸命ラッパを吹いた。こうして、三年間鍛え抜くうちに風邪一つひかなくなって、苦しかった小児喘息も何処かへ吹きとんでしまい、ひ弱だった身体もことのほか丈夫になった。

一方太平洋での戦局は、この頃を境に日一日と悪化していき、各方面では負け戦さの連続だったにも拘らず、大本営は負ける度に勝利勝利と、嘘の報道を繰り返して国民を欺き、あげくの果に破局の道を突っ走っていく。

昭和十八年の秋頃には、敗色歴然とし隠しようもなく、東京・大阪などの大都市では米軍機の爆撃が迫り、小学生は非常の事態に備えて地方へ集団疎開をすることになる。

疎開先は福井県どのことだったが、集団とはいえ未知の地だったので、ちょっぴり寂しく感じたものだ。しかし、私はラッパ手の仕事があったので日々を忙しく過した。

翌年二月、卒業のため五ヶ月の滞在で疎開生活を終え、お世話になった町を後に帰心矢のごとく懐しい大阪へ帰り着く。そして中学校へ入学したのだが、連日の軍事教練と工場での勤労奉仕。食糧増産のため、校庭を耕した麦畑の麦踏みなどもした。配給事情も悪くなる一方で、豆粕・海藻麩・芋のつるまで食べたが、小麦粉の団子汁などは大変おいしかったと覚えている。

三月十三日の夜、大阪は「B29」の大空襲があって、市内の中心地は大部分が焼夷弾のため焼け野原になった。その頃、我国の戦闘機の高度はせいぜい七千メートル位なのに、「B29」が一万メートルの上空から焼夷弾を豪雨のようにばらまく光景はすさまじく、探照灯や高射砲・戦闘機の活躍する場面など全く無いのと同じだった。

このようなことを今になって思えば、本土水際決戦などと言い、防空ずきんにもんぺ姿でバケツと竹槍を持って、必死の猛訓練をしても、肝心な時に屋根のない防空壕へ逃げ込むなんぞは笑止のさたと言う他はない。

昭和十九年六月七日、私の住んでいた家も御多分にもれず、やはり「B29」の焼夷弾攻撃に遭って、跡形もなく一瞬に灰塵と帰した。この時焼夷弾の落下と同時にメラメラと噴きあげた紅蓮の炎が、熱風に煽られて渦巻き、ごうごうと荒れ狂う様は、さながら焦熱の地獄であった。

私はその場にいたたまれず、死にもの狂いで逃げだした。ふと見ると知り合いが敵戦闘機の銃撃で、胸を打ち裂かれて倒れている。逃場を失った牛や馬も火に巻き込まれて半ば白骨の状態になり、焼け焦げた悪臭は鼻を突き、なんとも形容しがたい惨たんたる有りさまであった。

顧みると、人類は有史以来絶え間なく、地

球の何処かで戦争をして尊い生命を奪っている。

私は常に疑問を持つ。なぜ人間は血を血で洗う殺し合いをしなければならないのか。なぜ武器を持たず話し合うことができないのか。いつになったら平和な時代が来るのか。

このままでは、いつか核による偶発戦争が起きて地球人類の破滅を招くことになる。日本は、唯一核の被爆国として戦争に反対し、全世界に平和を訴えていかなければならない大きな義務があると思うのだが、ここのところを偽政者に問いただしたいのだ。

板きれ一枚になった兄

鈴木　清子●藤井寺支部

わが生きの皮引き剥がし引き剥がし平和行進の後につづけり

戦後四十三年、戦争体験を書くということになると、五十歳を過ぎたものでなければもう記憶を辿ることは無理になっています。私もそのぎりぎりのところですと前置をして……。

私の四人の兄の内三人までが兵隊に、そして長兄が昭和十九年五月、南方ニューギニア・ビアク島にて二十八歳の若き命を散らしたのです。今、地図に見るビアク島は、ほんとに小さな島です。兄の率いる高射砲隊は、マッカーサー元帥の東部ニューギニア戦略によってここに全滅したのです。

議の巣を反古などで覆って、火をつけたとしても、十四や二十四は逃げ出して来る。誰かそこから助かった人がいるかも知れない。それが我が息子であるかも知れない。亡母は長い間そう信じて待ち続けていました。

去年、東京九段の靖国神社の境内ではからずも入間魚雷などと一緒にニューギニアに配置されていた高射砲を見たとき、郷子の木の下、ほぼの爽けた軍服姿の兄の最後の写真がそこに重なり悲しみを越えて悔しさがこみ上げてきたのです。全員玉砕として帰ってきた遺骨箱の中には、名前を書いた板きれ一枚が入っていました。

玉砕とは、いさぎよく死ぬこととあります。兄も多分、父や母また幼い弟妹たちのために、ひいてはお国のために玉砕したと思います。当時の教育は徹底してそのようなものでありましたから。

あの頃の母の年齢に近づいた私、息子が二十七歳。どのように洗脳されてもあの悲しい戦争は決して繰り返すものではないと深く思うのです。

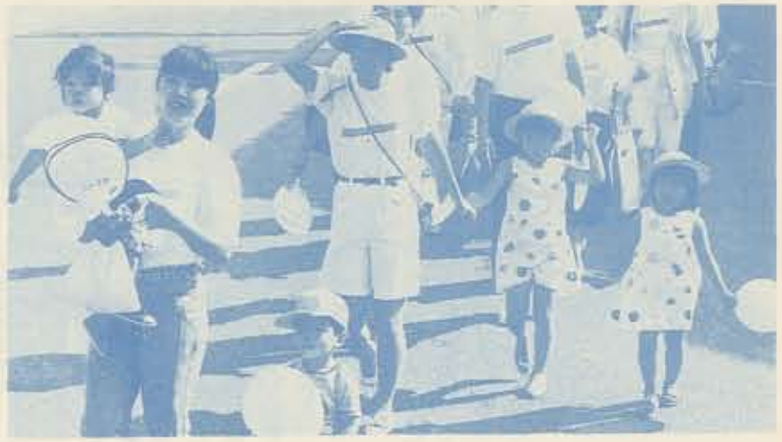
炎の中をくぐって

山中たい子●百舌鳥支部

私は西船場小学校五年生の三月十三日に、終了式を前にして戦災に会い焼け出された。家は大阪市西区靱南通りで、この日の爆撃はいつもとちがうようなので、祖父母と私と同居の知人と四人で信濃橋の角のビルへ避難した。焼夷弾の火の雨が落ちてはパッと火の手があがって、火たたきも防火練習も役に立たず逃げるのが精一ぱいであった。地下に避難してたいぶ時間がたったころ、組長さんが、「外へ出てもらうが、びっくりせんように」と言われた。外へ出たとたんあたり一面火の海で熱風が吹き、空は真っ赤。本町の御堂きんの屋根が炎の中にくっきり現れ、火柱が竜巻きとなって天に燃え上っている。私たちは炎の少ない西へ西へと逃げ、岡崎橋へ来たとき、どこからか「そっちへ行ったら焼け死ぬぞー」と声がしたので、また、もと来た道を市電の電線のぶら下ったのをまたぎながら、両側から燃えてくる炎の中を祖母にしがみついて防空ずきんと手で頭巾をおさえながら、必死で焼け跡の方へと逃げた。まだ燃えのこっているので、熱くてじっとしていられなくて足の裏が燃えるようで足ぶみしながら立っていた。横で電柱が火の柱になって線にかろ

うじてぶら下っている。花屋機も落ち、川の中に人が見えた。祖母と私以外ははぐれてしまい、朝まで道端の土管の中で丸くなって過した。灰色の雲がたれこめる朝、黒い雨が降った。それから中央公会堂へ行き、三角のおにぎり一コをもらう。幸い家族四人とも生きていた。集った人もみんな話す元気もなく、行く先もわからぬまま別れて歩き出した。途中、大丸の前で上の方が燃えていて倒れて来たらあぶないとヒヤヒヤしながら走った。霞町を過ぎたところで夕方になり、しんどくなって途方にくれている時、知らない方から、うちへ泊ってくださいと親切に言われ、二晩もお世話になったことはいつまでも忘れられない。十六日に知人のリヤカーに四人乗せてもらって堺にたどりついた時は、顔や服もみなススで黒くなっていた。父方の祖父は病気で逃げおくれ、「助けてくれー」の声が炎の中から聞こえたそうだ。その後、堺の空襲で小学校が焼け、焼け跡片づけをするうちに八月十五日を迎えた。

電燈が太陽のように、サイレンの音にまだ悪夢を感じながら、もう防空壕へ逃げなくてもいいと、ほっとした。祖父は買い出し途中ホームから落ちて足をケガし、十月に亡くなった。



あれから四十三年、仏壇に手を合わすたびにこの阿弥陀さんと位牌は祖母が空襲の時いつも袋に入れて逃げたもので、当時を思い出しながら、もう二度と戦争なんかないように今年も平和行進に加わりたいと思います。

父の終戦

清　百合子●津久野支部

私の父にとって八月十五日の敗戦は、そのまま失業を意味した。といっても軍人ではない。パイロット養成学校の教官である。

父は一九二〇年、広島で生まれた。旧制中学四年のとき、当時最もカッコイイ職業だった（と彼には思われた）パイロットにあこがれて中学を中退、新設されたばかりの米子航空乗員養成所に入った。日本が日独伊防共協定を締結し、日中戦争に突入した翌年である。すでにパイロットはカッコイイだけでなく、「死」と直結した危険な職業となっていたはずだが、こわいものなしの十八歳、ただ空を自由に飛んでみたいということしか念頭になかった。

日米開戦の前年には二十歳で母校の助教となり、開戦の翌年には教官となる。ここの卒業生は全員陸軍飛行学校に入り、爆撃機、戦闘機、偵察機のパイロットとなった。国民がまだ緒戦の戦勝ムードに酔っていたころのことである。このころの父はずいぶんモテたようだ。それもそのはず、国内には若い健康な男性がほとんどいなかったのだから。教官だから行動の自由はきく、給料はいい、職業は花形ときては、モテないほうが不思議だ。この時期は父の生涯でも最も華やかな時期だったと思う。

昭和十九年、二十三歳で母と結婚、翌年一月、私の姉が生まれたが、急に埼玉県古河の高等乗員養成所に単身赴任することになった。古河の教官がいっきょに半数に減っただめ、緊急にその穴を埋めねばならなかったからである。当時古河の所長は陸軍少将だったが、この男が実は、軍の物資を横流しして私腹を肥やしていた。それだけなら別にめずら

しくもない話だが、教官有志が連名でこの男を航空局に告発したため、事態は急展開する。その結果、陸軍少将はおかまいなし、告発した教官たちは上官を中傷したフラチな輩として、全員前線に送られてしまったのだ。一種の緩慢な死刑である。彼らのうち何人が生きて帰っただろうか。

吉河での父の仕事は、特攻隊の養成であった。すでに飛行機も燃料も極度に不足していたのだから、練習どころではない。ふつうなら半年かかるところを三ヵ月で卒業させて、陸軍に送りこんだ。このにわか仕立てのパイロットを、ポンコツ飛行機に乗せてどうしようというのか。父はその無謀さを知っていたはずだが、それについては何も語らない。私もあえて聞く勇気がない。彼の待っている黄ばんだアルバムには、少年のような生徒たちの写真が並んでいる。ほとんどが戦死した。生徒たちの中には中国人もいる。

八月六日、広島に原爆が投下された。はじめは新型爆弾と言っていたが、八日に当時の物理学の最高権威であった仁科芳雄博士が、原爆であることを確認する。十三日、父は急きょ大阪へ飛び、そこで仁科博士に会うよう命じられた。八尾飛行場に着くと、参謀本部の新妻中佐と仁科博士とが待っており、広島に米軍の落とした検知機（放射能を測定するものか）があるから、それを受け取って帰れという命令である。父が広島出身だから、特に白羽の矢が立ったのだろうか。広島には彼の祖母、両親、兄一家が住んでいた。

十四日の朝、広島上空に着いた父は、その想像を絶する惨状に言葉をなくした。彼はいつも日本中の都市を上空から見てきた。空襲で壊滅した都市も数知れず見た。しかし今眼下に見るふるさとは、これまでに見たいかなる都市とも違っていた。空襲でどんなに徹底的に破壊しつくされた都市でも、大きな建物、神社、寺院、大木などが、ぽつりぽつり残っているものだ。しかし、ここには何もない。きれいさっぱり、地上にあったすべてのものが消滅しつくされていた。「きれいだった」と父は幾度も言う。まったく不謹慎な言い方だとは思うが、ほかに何とも表現のしようがないのだった。

飛行場、というよりもと飛行場であった場所に着陸した。森閑として人っ子ひとりいない、しばらく待っていると、ようやく地下壕から兵隊が三、四人ふらふらと這いだしてきた。みんな首にホータイを巻き、虚脱状態である。任務を伝えると、彼らは壕から検知機を運んで来た。高さ一メートル三十センチ、直径四十センチくらい、ジュラルミン製の円筒型の機械であった。

任務を終えた翌日、父は小牧飛行場で敗戦の放送を聞いた。敗戦はすなわち失業である。二十歳そこそこで「警察署長や中学校長と同じ」だった俸給ともおさらばだ。妻子の待つ米子へ帰った父は、国鉄に入社したが、月給は教官時代の四分の一になった。これでは食べていけない。そこで、そのころ商売を始めてかなり成功していた母の兄（私の伯父）の下で、商売を始めることにした。これはよくよくのことだったに違いない。飛行機に乗ることしか知らず口下手でプライドの高い父は、およそ商売むきではなかった。かわって意外な能力を発揮したのは母である。まがりなりにも今日まで店を続けて来られたのは、ひとえに母の力によっていた。

商売のほうは、今では兄があとを継いでいる。むかし、飛行クラブに入りたいと言って母をこまらせた父は、今、水を得た魚のように、乗員養成所同窓会の世話役で飛びまわっている。やれ記念碑、やれ機関誌、やれ会合と、母に言わせれば「まるで命がけ」の打ち込みかただそうだ。思うに、一般の人と違って、父にとって戦争時代は、輝ける「黄金の日々」だったのではないだろうか。不本意な商売をいとなんだ戦後の四十数年は、むしろ夢かまぼろしのようなもの、父の心は文字どおりうわの空だったのだ。

戦争に関する父の思い出は、楽しげなものばかりであって、彼の口から一度も戦争批判らしい言葉を聞いたことがない。それだけ彼は正直なのだろう。大好きな飛行機に思うぞんぶん乗れて、俸給をとり、女にモテる。これで批判などしてはバチがあたるというものだ。

今、戦争反対を叫ぶ人々の多くは、戦争には百人が百人かならず反対するものと思いこんでいるようだ。だが、それはあまりにも人がよすぎるのではないか。忘れてはならない。戦争はもうかるものだ。目はしのきく人間なら、ぬれ手で粟の大もうけである。残念ながら、父は戦争でもうけはしなかった。ただ与えられた任務を忠実に果しただけだ。彼など

は、戦争を楽しんだ人々のなかでは殿下廳に属するだろう。だが、父のような人々は決して少なくはない。おおっぴらには口に出せないが、あのころがなつかしい。そういう人もいる、それもかなりいるということは、忘れてはならないと思う。戦争でもうけた人、戦争を楽しんだ人、あのころがなつかしい人、そういう人々のいることを忘れて、そんな人達に「悲惨な戦争は二度とごめんだ」と叫んだどころで、それは空にむかって銃を撃つようなものだ。

しかし、これらの人達をも包み込んで、核軍拡の時代の反戦平和をおし進めなければならないと思う。銃は、真の敵の所在を見定めて撃つものだ。

幼き犠牲者

渋谷　文子●島泉支部

「アメリカと戦争をしている。十年戦争だそうだ」ときいても体験もなく、戦争は外地でするもので、よもや本土まで敵機の襲来を受けようとは夢にも思わなかった。昭和十七年三女誕生。その頃はまだ物資の欠乏とまではいかなかったけれど物を買うのには行列を作ってでないと手に入らぬ様になった。買い出しのため、満足に世話も出来ず、食事にも不在意で夏ではあるし、厠を患いとうとう幼い命を絶った。誕生日がお葬式の日になって悲しみも一入だった。これも戦争の犠牲者の一人と思える。

その後、太平洋戦争も次第に悪化し、物資の乏しさも増し、両親一男二女五人家族の生活にも困る様になった。主人の商売も出来ず、公務員に転職したが、根っからの大阪商人のこと故、畑違いで数年でゆめてしまい途方にくれる日々だった。まさかと思っていた内地への敵機の襲来も日増に烈しくなり、爆音の不気味さに夜も安らかに眠りにつけず、空襲警報の声に起こされて庭にこしらえた防空壕へ走り込んで、息を殺して音の途のくのを待ってホッとしたものだ。警報を聞くと三歳の次女は防空頭巾をかぶり、これで安心という様にしていたあどけない顔も四十年経た今でも鮮やかに心に残っている。

闇物資などはあり、一部の人は不自由のない日を送られた様にきいてはいるが、その余裕もなくそうそう買ってもおられなかった。近くの土地を隣組で借り、僅かの野菜を作り雑炊も作った。いものつるまで食べたがおいしかった。

戦況も悪く、せめて子供だけは命の安全をという上からの通達で学童疎開をすすめられ、集団疎開より田舎の親類がいいと思い、長男長女を岡山の実家にあづけることにした。そこにも姉の子が五人もあり、人の子どころではなかったろうに迷惑をかけたと思っている。子供もなれぬ百姓仕事もしたらしい。学校も遠くなるし田舎の悪童等のいじめもあって可愛想なめをさせたとくやまれてならない。

こちらの方では家族は少くなったものの、寒い山里でどうしているやらと心の休まるときとてない。正月も過ぎ、せめて長女だけでも連れて戻るつもりで行くことにする。不自由な物の中から珍らしい品を少しずつ集めたのを持って、今なら四時間ほどで行ける処を一日がかりで駅に着いたのは夜で、道などよく分らなかったが、普通い慣れた道故、二女を背に一時間程かかり家についた。床についていたけれど起き出て思いがけぬ訪れに喜ん

でくれた。当時小学三年生の兄にはもう暫く辛抱している様に言ったものの、おいて帰るにしのびず二人とも帰阪させることにした。時間通りに汽車も来ず、子を背から降したとたんに来てあわてた。すし詰めの列車で立ち通しで帰った。

戦争も増々烈しく敵機の襲来も夜昼なしにきて、それにつれて食糧事情は極限に達し食事らしいものも食べさせられなかった。配給の中でもトウモロコシのパンやさつま芋はよかった。忘れもしない三月十三日の夜、西区にあった持ち家も戦火で失った。夜なのにまるでひるのような明るさで恐ろしかった。ここもいつ焼かれるか分らないので親子疎開のすすめがあり、意を決して五月母子四人で東京に帰った。

主人だけは務めていたので残ることにする。今度は実家へ厄介もかけられず、ちょっと離れた叔母の家の小屋の二階をかりることにする。子どもたちは山道を越えての通学が大変だった。第一履物に不自由で、運動靴さえ配給で右ころ道には弱くて雨の日など特に困った。天気なら藁草履などはいた。その頃草履作りも覚えた。田舎だといっても食糧が廻るわけもなし、山菜とりに行き保存食を作ったりもした。明けても暮れても食糧のことが第一で、山に近い荒地を借りて、芋、杉菜の生え茂ったのを掘り起こすことに余念がなかった。重労働であったけど畑もでき、薯や小豆、大豆等植え食糧の足しになって大助かりした。いろいろと苦労はあったが、病気もせずにおられたことは天の恵みであった。不自由な暮らしながら母子ともにおられたことはせめてもの救いだった。

昭和二十年八月十五日、十五年の永きにわたる戦いも、敗戦ということで終戦を迎えた。負けるなど思ってもみなかったもので只呆然とするのみだった。喜こんでいいのか悲しんでいいのかとまどったが、内心はホッとしたのではなかったろうか。終戦にならなかったら広島・長崎のように原爆を落とされてどうなっていたかと思うと肌が粟立ってくる。

戦後も相変らずの苦しい生活ながら、どうにか生き抜き、二年後の冬、幸い大阪の借家も残っていたので帰阪した。いろいろのできる事は数限りなくあったけれど、人並みの暮らしができる様になった。子ども達に充分なことをしてやれなかったけれど横道へもそれず成長しそれぞれの家庭を持って優しくしてもらっている。主人も昨日の様に思うのにもう逝って十四年経ってしまった。戦争という時もわるく、細々とした心遣いにも欠け、不満の多いことであったろうけれど、時節故と許してくれて守ってもらっていると自らなぐさめている。

私もこの六月で八十四歳、よくぞこの歳まで!と感謝の毎日を安らかな内に送らせてもらっている。病気はないけれど歳並みに弱りお役に立つことも出来ず、皆の迷惑にならぬ様絶えず思いはするけれど思ってもせんないことと何事も神の恵召しにまかせるとしよう。

この土地にも五十余年住み親しい交りの人も多くあったけど、今では先立たれた人が多くなり、語る人も僅かになり身の辺りも次第に淋しくなって来たけれど、これも致し方のないことである。私事ばかりで申訳ないがこの様な悲惨な戦争だけは二度と繰返してもらわぬ様お願いしたい。豊かな国だと言われている様ですが、まだまだ困っている人のことを忘れないで、いい世の中になる様、政治家の方々にお願いする次第である。

戦争はもういやだ

山條　梅子●高石支部

深夜暴走族の騒音に突然眠りを破られる。時計を見れば二時。爆音のような響きを残して彼等は次第に遠ざかっていく。しかし、いったん眠りを破られた私はどうも眠れそうもない。眠られないままに色々なことを考える。〝彼等はこんな夜中にいったいどこから来て、どこへ行くのだろう。彼等も人の子、親達はどんな思いでその帰りを待っているのか。オートバイだって決して安くはないのに。命がけで暴走する魅力は何なんだろう〟次から次へと様々な事を思い巡らしていた私は、最後におきまりの終着駅に着く。〝そうだ、戦争よ

りはまだいい。

麻薬、非行、暴力等々、それが特に若者に関わる場合は殊更に心が痛む。なぜ、なぜ、なぜと。でも、それらを止める何の力もない自分を悲しむ時、〝そうだ、戦争よりはまだいい〟と自分を慰める習慣がついてしまっているのだ。戦争、この悪に比べれば、他の悪なんて足許にも及ばないと思うからである。だからといって、伏して他の悪を肯定しているのではないが。

私が戦争を知ったのは昭和十二年、小学校五年生の時である。支那事変と呼ばれていたこの日中戦争は、子供である私にとって、村から出征していく僅かばかりの兵士の見送りと、中国の大都市を陥落させた時の街行列や提灯行列への参加で、むしろ楽しく面白いものとしてしかとらえることができなかった。今考えるとこの頃の戦争は、日本の各地に爆弾が落ち、焼夷弾の雨が降った戦争末期のものよりも、もっと怖しいものであったとの思いが強い。なぜなら、私を含め当時の大人も子供も、その戦時の陰に中国大陸で家を失い、親をなくし、子を殺されている数多くの中国人のいることすら考えようとしなかったのだから。

昭和十六年、日米開戦後は出征していく兵士の数は増え、村に還ってくる戦死者の遺骨の数も多くなった。日中戦争当時、英霊と呼ばれ盛大な村葬で弔われた戦死者も、その数の増大とともに村を挙げての村葬などは行われなくなり、家族の悲しみと無念の中でひっそりと葬られるようになったのである。

昭和二十年七月十日、この日かんかん照りの太陽が西に傾いた頃、貧しい夕食でかろうじて飢えを凌いだ私の家族が、灯火管制下の暗い電燈の下に集まり、団扇を使いながらみんな無言。でも父や母の心は、ずいぶん永く便りのない戦地の二人の息子の上に馳せている事は確かである。私は黙々と明日の授業の下調べ。この年の四月初めて教壇に立った私には、元気な子供達と一緒に学び一緒に遊べる明日の歓びが待っている。柱時計が十時を打ったのを機に、一足先に床に入った父母に続いて私も寝床へ。勿論寝巻などに着替えての就寝ではない。いつ襲ってくるかもしれない空襲に備え、着のみ着のままで横になるだけである。横になって暫く、まだ眠っていない私の耳に表のざわめきが聞こえてきた。何だろうと表に出てみると南の空が赤い。「これやったら和歌山あたりやで」等と話し合う近所の人々の中で私もじっと目を凝らす。一瞬まっ白な閃光を放って照明弾が下っていく。続いてこれ程大じかけの花火があるだろうかと思われるような火花の落下。恐しいというよりも美しいという感情の方が先立ってしまう。

和歌山の空をまっ赤に染めた焼夷弾の雨もようやく下火になり、近所の人が三三五五家に入ってから十分も経っただろうか。けたたましくバケツを叩きながら空襲警報を告げる町会役員の声が道路を駆け抜けていく。父は早速勤め先である農協を守るため家を出る。母と私、それに近所に住む姉とその子供達は防空壕へと駆け込む。暗くむし暑い壕の中で身をひそめる事数分。壕の前にバラバラと火が降ってきた。しばらく壕の中で息をひそめていた私達は、焼けつくような熱さに身の危険を感じ壕から這い出る。道にも家の板壁にもびったりとはりついたボロ布が炎を上げて村を焼きつくそうとしている。母は水に浸した火叩きで家にはりついた炎を叩き落とし、かかる。私は今年一年生に上がったばかりの甥と三歳の姪の手を引き、赤ん坊をおぶった姉と共に炎をかいくぐって広場へ。広場へたどり着いた私は壕を出る時持ち出していた夏布団をたんぼの水に浸し、二人の子の頭にかぶせ「どこへも行かずここでじっとしてるんやで」と言い残し家の方へとって返す。「ねえ

ちゃん怖いよう」駆け出した私の背に母達の悲鳴が響く。家に着くと母はまだ表の炎との戦いだ。入口を開け家に入った私は思わずたじろいでしまった。懸命に表の炎と戦っている母の所作もむなしく、裏口の方は全く火の海なのである。〝もう駄目だ〟観念した私は、せめて最も大切なものだけを持ち出そうと自分の部屋に駆け込む。本箱の上の三冊の辞典を抱え門口へ。この時私の頭にふと母の顔が浮かぶ。〝そんな物を持ち出して何の足しになるの〟女の子に学問は不要だとの考えを持つ母の事である。今こんな時に本など持ち出した私を見ればきっとこう言って叱るだろう。私は煙の充ちている自分の部屋に再びとって返し辞典を元の位置へ。眼が痛い。息が苦しい。それでも私は更に台所へと進み食器入れの戸を開ける。配給の大豆を入れた小さなざるがぼんやり見えた。私はそれをつかむと一目散に家から走り出た。外にはもう誰もいない。みんな広場へ避難している筈である。私は道路のあちこちでメラメラと燃え続けている炎の間を縫って広場へと急いだ。防空頭巾を覆り不安げに立っている人の群。私もその中に混って自分の家の燃け落ちていく様をじっと見ながら立ちつくしていた。

昭和二十年七月十日、今は堺市に編入されている鳳尾村での戦いである。戦争はもう嫌だ。

戦争の思い出

匿名希望●貝塚市

三月十四日未明のことでございます。

私は神戸に居ました。警戒警報で目をさまし急いで防空壕へ入りました。東の空は一面に赤く燃えていました。大阪方面でした。三時過ぎに神戸を後にして大阪へ向いました。阪急、阪神、大阪駅附近は焼けていました。大八車に少しばかりの荷物をつんで道ゆく人は疲労、顔は黒く、歩みも遅く、時く淋しそうでした。再度神戸へ向いました。十五日は早く出て交通の有る所まで歩こうと思いました。梅田で少しの荷物でウロウロしていました。ある人が地下鉄で行ける所まで行けば何とかなるでしょうと、玉田まで来ました。少し歩いて、南海電車が有りました。やっとの思いで堺まで来ました。手は傷していたし少しの荷物が有りましたので、被爆者と間違えられました。今でも大阪へ行けば、あの時の事が思い出されてきます。

二日後に、神戸が空襲にあいました。神戸の三宮附近はひどい事でした。

七月九日、堺が空襲にあいました。私の家の前を、正四角に雨が降る如く爆弾を落されました。空は一面真っ赤で昼の如くでした。造船場が近くで、進水式を前にして焼かれてしまいました。目の前でしたので、こわくてこわくてこまりました。急いで防空壕に入りました。頭の上を過ぎて行く飛機の音は非常に高く耳をツンザク思いでした。時が過ぎて明方の三時近くでした。ほっとする間も無く、無情な雨に見舞れました。

明けて私は出勤しました。昨夜の空襲で出社しない社員を見に行く事になり、二、三人で堺の出島、宿院へと向いました。宿院一帯は焼野原でした。右往左往していると、黒くなって死んでいる人も多く見ました。川尻の所では、夜着のままで死んで、帯の様に並んでいる所を見ました。道も広くない所で、火の手も早く大変な事でした。夕方に食を開けるとパッと火の手が上りました。今でも川尻の所へ行けば思い出されて来ます。夜を通して、なくなった人を焼く火が見えました。

早四十余年の年月は過ぎ去ろうとしています。多くの人の死を礎として今日有る事は夢の様です。堺駅の近くで無縁者を祭っている所が有ります。

皇国史観に育てられ

岩井　葉子●志岡支部

私は鹿児島の阿久根の海岸沿いで育ちました。小学校の頃より軍国主義、皇国史観に毎朝礼で、校長の教育勅語の暗唱、軍事教練の毎日でした。幼い男の子等に大きくなったら何んになると尋ねますと、大将になると、胸を張っていっておりました。軍事希望に燃えて体力作り、天皇泰公を夢見て育てられた時代でした。学生時代も毎日教練のくり返しで校長も国民服に足はキャハン姿、英語は絶対廃止。毎日真黒になり防火訓練、竹槍訓練、十六年十二月八日大東亜戦勃発、激化、だんだん食糧事情は悪くなり、配給制度となり毎日コッペパンをかじりながらの激しい訓練でした。

男と言う男は皆召集され、十六歳・十七歳で志願入隊、二学級下の人々は学徒動員で軍需工場で兵器作り。残されたのは、老人、病人、女、子供、又仕事を持ってない女子は徴工で引っぱられました。軍国主義で仕込まれた私共女性も、もし女性志願があるならばと、女性で奉公できるのは、従軍看護婦、軍属タイピストでした。十七年三月、どうにか卒業できる事になり、タイピストを目指し、習得致しましたが、これも父、母の絶対反対で断念致しました（父、母の先見の愛の思召しで今ここに生きる）感謝しております。

田舎に帰り銃後の守りにつく事になり、青春は戦争のまっただ中、勝のみ信じて、近くに航空隊があり、週に一回は少年隊員の方々への慰問、特攻隊の出動待ち、明日をもわからない死の攻撃、胸もつまり、皆、若さで楽しそう（心の中は死の苦しみ）でした。激戦化、毎日、空襲の中、農家への勤労奉仕、防火訓練、竹槍訓練、海岸沿いには陸、海、軍の兵士が防備されて、ぶきみな町と化してきました。

海岸の小辺に海軍基地の砲台作りに、毎日奉仕させられ、沖縄激戦の報で、もしもの場合、自決説もあり、一丸となり頑張りました。

今日はいよいよ高射砲の設置で試射の日、八月十五日、伝令が参り、終戦を聞き、ア然となり、まさかまさかと連発でした。

重大な天皇の玉音放送があると、ラジオのある家に集合するようにと、命令が有り、放送を聞きました。私共皇国史観で育てられて勝つのみ信じ、くやしさは人一倍、残念で泡き合って泣き叫び、兵士は肩を組み、男泣きに涙をふいて居られた。又一入でした。

親友も市内の病院で看護婦をしており、爆弾の直撃をうけて亡くなり、又大勢の犠牲者の家族、気の毒で言葉もない日々でした。

戦後食糧事情も悪く、農家でさえも困る状況で、心身共に大混乱に陥り、すさんだ冷い人間と化して、仕事もない人が多く、悪性の世の中が数年続き、ようやく暮し易い豊かな日本と変って参りましたが、又政治の古い頭、老若男女で命有る限り二度とふたたび恐しい核戦争反対を息切れすることなく、叫び続けなければなりません。息子、孫を戦争には行かせたくなく、平和を願いたいものです。

長崎の被爆地、世界大会に参加させて頂き、被爆者の方々の永年の苦しみを訴えられ、忘れがちな自分達が恥しくなり、申し訳なくなり、私共体験者が語りつづけて行かなければ他にないと決意して帰って参りました。四十三年前を思い出し記す気になりました。お役に立ちますかどうかと思いますが…。

空襲下の私たち

山下ハルヱ●藤井寺南支部

戦局が次第に敗戦の色を濃くしつつあった昭和十九年、教員だった私は、高等小学校二年女子組を引率して軍需工場での軍服縫製の勤労奉仕に従事していた。が、大阪大空襲の噂もあったので、徳島に集団疎開していた大阪市の小学校に転任を頼んでいた。

家庭は、主人は出征し、両親、子供三人、私を含めて六人家族だった。

生活上一番困ったのは、食糧と燃料だった。お粥や雑炊が多く、これを炊くガスも制限があり、冷めない工夫や朝の四時頃のガスのよく出る時間帯に炊いておいた。

明けて昭和二十年、厳寒期に入ると敵機の来襲が頻繁になり、民家、工場は、焼かれ、生活も生産活動も害されて、人々の戦う気持も大いに失われた。

恐れていた日は遂に来た。三月十三日、それは、大阪大空襲だった。

日中は、なんとか無事に過ごし、一日の仕事も終えたがこの日は、早くから空襲警報がでていたので、防空壕の中で待機していた。私は、「この場におよんで、じたばたしても仕方がない。冷静に判断し、無事に家族ともども避難すること」と心に決めていた。

私は、壕から出て周囲を見きわめた。街は、全ての明かりが消され暗黒の街となっていた。

突然、西の空が、真赤に燃え上がり激しく火を噴いた。私は壕に向って「さあ、逃げるのよ。早く出て」と呼びかけ、かねての打合わせのとおり手をつなぎ合い避難しはじめた。が上六あたりまで焼夷弾が投下され、一面火の海である。私は、とっさに向きを変え南へ南へと家族と共に走り出した。

やっとの思いで知人の家にたどりつき夜が明けるまで休ませてもらった。

翌日、かねて手配してあった避難列車で徳島に疎開した。

軍国少女として生きたあの頃

国仙谷邦子●泉北ひのお支部

昭和二十年六月、当時女学校二年生の私達にも動員令が出され、大阪市内に焼け残ったミシン工場で働く事になりました。兵器でない事で初めは大いに不満でしたが、軍服や落下傘を縫う為にと言われ、戦争に参加できる喜びと誇りに胸を躍らせたものです。物心ついた頃、日本は中国との戦に突入しており、大陸での大勝利に国民は酔いしれ、米英との開戦へと緊がって行く中で、私達は見事に軍国少女として育っていました。見る物聞く物すべて戦争に結びつき、聖戦の名の下に日本は神国なりと教えこまれ、国難ある時は元寇の故事の如く神風が吹いて、必ず勝利を得られるのだと、本気で信じていたのです。

モンペ姿に防空頭巾を肩にかけ、焼け跡を歩いての工場通い。年配の工員さん達にまじって油にまみれ、爪を真黒にしての作業は決して楽ではありません。食糧事情も極めて悪く、丼鉢一ぱいの青菜が殆どの雑炊か、ピンポン玉大のじゃがいもが三つ四つに塩が少々、といったものが昼食です。それでも給食があるというだけでも有難く、他のクラスからは大いに羨ましがられ、私達は食前食後に合掌し心から感謝して戴いたものでした。

その頃の「我ガ方ニモ若干ノ損害アリ」という大本営発表は、味方の劣勢をひた隠しにしたものだったのですが、各地の玉砕、撤退の報も次々ともたらされ、もはや戦局の不利は覆うべくもなく、奪われたサイパン、グァム等の島々から毎日のように米軍機が飛来し、焼け残った町々に執拗に空襲を繰り返していました。私達も作業中に幾度この恐怖の洗礼を受けたことでしょう。警戒警報のサイレンが聞こえると、途端に胸に大きな火の玉がこみ上げ、それが体中にかけめぐるのです。蝋がガチガチ鳴り体中が震え出すともう止まりません。どの友の顔も蒼白で目が吊り上っています。先生が「落ち着かない人ご不浄を

すませて来なさい！」といわれ、その通りすると不思議に少し気が鎮まるのですが、やがて空襲警報のサイレンと共に頭巾をかぶって防空壕へとびこむと、恐しさは頂点に達してしまうのです。米機の爆音（私達は聞きわけられました）が頭上に近づくと、ヒューと云う落下音に続いて、ズズズーンと大音響と共に壕全体が激しく揺れ動き、伏せている頭や体に、土砂がザーッと雨のように降り注ぎます。死ぬ時は皆一緒よと固く抱き合った友の激しい鼓動が伝わって、自分の心臓も口からとび出しそうです。またヒューが！　今度こそ駄目か！　ズズズーンが聞こえると生きていた証し。だが、ヒューは次から次へとやって来るのです。私達の学校は厳の厳しいことで有名で、軍国少女達は必死で声を上げずこらえていたのですが、遂に一人が「お母ちゃん！」と泣き叫び、別の友は壕の外へとび出そうとしたりして、皆で泣きながら懸命に止め、又次のヒューに重なり合って身を伏せ、地獄の使いが通り過ぎるのをただ祈るしかなかったのです。狭い壕の中は酸欠に近い状態、しかも炎暑の季節で蒸しぶろのよう、その中で厚い頭巾をつけ大勢でぴったり体を寄せ合

っての恐怖の時間の、何と長かったことか、とても筆舌には尽くせません。激く爆音が遠のき、壕の蓋を開ける時の嬉しさ、どの顔も汗と涙でぐしゃぐしゃのまま、胸一ぱいに深呼吸をするのでした。明日がどうなるか、誰も口にすることはなかったのですが。

月に数回の登校日のある日、申し訳のように授業を受け、市内中心部に空襲があったため、早々と帰宅しました。翌朝いつものように工場へ出た私は、我が目を疑い呆然と立ちすくみました。私達の作業室や壕が勿然と消え去り、その場所に大きな池が満々と水を湛えていたのです。前日爆弾の直撃を受け、大きく抉られた深い穴に、夜来の豪雨が溜っていたのでした。もし登校日でなければ、私達も壕ごと吹っとんでいた筈だったのです。工員さん達は全員別の壕におられて一人の負傷者もなく、私達は引きつった顔を見合わせながら、お互いの無事を喜び合ったのでした。

終戦の詔勅は工場の一室で聞きました。最後の勝利を信じて精一ぱい頑張っていた私達には、容易に信じられない、悲いがけない結末でした。日本が敗けた！　神風は吹かなかった！　泣いて泣いて、どうやって家まで辿りついたのか、今は機影の見えない空を見上げ、むなしさばかりがこみ上げて、涙が止まりませんでした。が、暗くなり灯を点けた時、それまで永い間電灯を覆っていた黒い布を外し、近所の家々のやはり明るくなった窓を見て、やっと恐しい空襲から解放されたことに気付いたのです。敗戦後の不安は一ぱいでしたが、爆弾が落ちてくることはもうないのです。そして軍国少女の目から鱗が落ちました。

今、世界中の何処かで、もっと悲しい目に遇っている大ぜいの子ども達を思い、胸が痛みます。地球の上から「戦争」の二字を消してしまいたい。心からそう願わずにおれません。

白いマフラー

守屋　公子●福田東支部

今まで多くの人の戦争体験記を読ませてもらっていましたが私などの体験は…と思っていましたが、どうしても目の中に焼きついて忘れられない光景があります。

終戦の少し前の暑い日のことでした。私は女学校の一年生で白い制服も機銃掃射の的になると紺色に染めていました。警戒警報が出ていましたが、急にバババンとすごい音がしたので何がなんだかわからず無我夢中で地面にふせましたが、ふと見ると電柱の高さぐらいまで艦載機（軍艦から飛び立つ飛行機）が下りて来ていまその中で操縦士が白いマフラーを風になびかせて撃っていました。十代初めの一番多感な少女期に体験した風になびいていた真白なマフラーがどうしても忘れられません。その時道を歩いていたおばあさんが撃たれて死にました。戦争に何んの関係もない年寄りを殺すそれが戦争なんです。

それから少しして父が病気で死亡しました。

親戚の者もいつ空襲があるかわからず家をあけられず家族だけでひっそりと葬式をすませました。その頃は良い薬もなく焼け死ぬより見守られて死ねるだけ幸せでした。

死体を焼いてもらうにもマキを持って行かなければ焼いてくれない情勢でリアカーにカンオケとマキを積んで母がひっぱり姉妹で押して持って行きました。

それから四十三年毎日新聞で国民学校の同窓会が「四十年ぶりの修学旅行を」との呼びかけの記事を見つけ自分の娘と同じ日に伊勢に修学旅行に行きました。集合場所で幼な友達の顔を一目見たとたん「生きていてよかった」と言葉にならず抱き合って泣いてしまいました。もう少し戦争が永引いたらと思うとぞっとします、どうぞこの様な戦争を再び繰り返さない様に平和な世界をと願います。

父と戦争

西谷　明●新金岡東支部

父は今年六八歳になります。昭和十四年、数えの二一歳で召集され、二七歳の時に浜松

で終戦をむかえたそうです。父は私達子供には戦争の話はしませんし、戦後生まれの私達も詳しくは知りませんが、中支(中国)に送られ、そこで左腕を負傷し、九死に一生を得て帰還したそうです。その戦線では、一〇人のうち八人は戦死したそうです。苛酷な環境のため、結核も患らったそうですが、戦後のどさくさのなか、たいした治療もせずにいたのに治ってしまったそうです。戦後を豆腐屋として貧しく清く正しく生き、長男として親を送りそして四人の子供達もそれぞれ成長し、結婚し、これから老夫婦二人の静かな生活に入ろうとしていた矢先に厚生省から一通の封書が父のもとに届けられました。戦時中に負傷した時に検査をするために使用したドイツ製の造影剤は放射能物質を使用していたので、その後、身体に影響が、出ていないか調査するので、千葉大学まで来られたしということでした。「トラトラス」と呼ばれる、その注射を受けたのは、父の住んでいる三重県では、三〇〇人いたそうです。最後の戦友も去年の六月に亡くなり、今は父一人が生存しているだけだそうです。その注射を受けると、放射能が体内に蓄積され、普通の一〇〇倍の率でガンが発生するそうです。父の口からは四〇年以上過ぎた今も、放射能がもれているそうです。昨年の千葉大の定期検診で、胆嚢に影が写っているので、もう一度、精密検査されたしと言われ、またしても、父は老体にムチうって三重大で検査を受けたのですが異

常なしといわれ、ホッとしたのもつかの間、今度はアゴに潰瘍ができ、ガンではないかと心配しておりますが、もう検査はいやだといって薬局から薬を買って、自家療法をしております。父が今までガンにかからずに、生きてこられたのは奇跡に近いそうです。父の年代の人達は、父以上の御苦労をされた方々が、沢山おられることと思います。私達からは、想像もつかない体験をされた方々ばかりだと思います。父も今は、すっかり好々爺になりましたが、私達子供には、こわくて厳しい父でした。そんな父がいっそ戦死しておった方が楽だったのに、問明なき召集を受けた時のことを、今だに夢にみてうなされることがよくあると申しておりましたが、「子や孫のため、決して自殺だけはせんといてよ。」と冗談めかして、言いましたが、苦しみが大きければ大きい程、悲しみが深ければ深い程、自分の体験は、語れないものだろうと思います。

戦後生まれの私には、戦争のおそろしさもコワさも語れませんが、戦争により誰よりも苦しんだ、父や母の年代の方々が、幸せな、老後を送られますようにと、祈らずには、いられません。